

大
官
町

428
435

年の学制発布により、新しい学校教育がスタートするとその必要はなくなり廃止された。

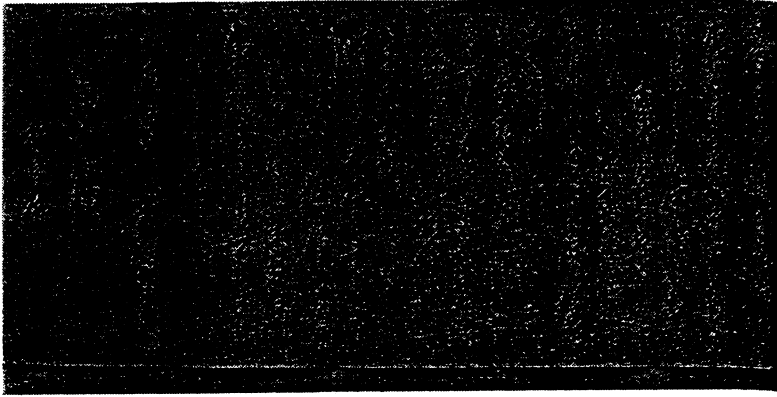
第四節 幕末の大宮地方

一 天狗諸生の争乱と大宮地方

水戸藩内は天保改革をめぐる、改革派と保守門閥派の対立が一層はげしくなった。この両派の対立のもとには改革以前にさかのぼるが、幕末になると、天狗・諸生と呼ばれて、ことごとに対立の様相をみせるようになった。天保一五年（一八四四）、藩主斉昭は幕命により謹慎となり、改革派は失脚した。藩主が慶篤に代わって保守派が実権をにぎったが、嘉永二年（一八五〇）斉昭の謹慎が解かれると再び改革派が台頭した。

安政に入って幕府内に將軍継嗣問題が起こると、斉昭の子である一橋慶喜を推す一橋派と紀州藩主徳川慶福（のち將軍家茂となる）を推す紀州派が、外交問題に関しては攘夷・開港論で対立するころ、大宮地方からも鷹巢村の神官豊田重章が、同村の鴨志田伴七、吉川惣衛門らを伴って、一橋派に加わり活躍している。

安政五年（一八五〇）四月、彦根藩主井伊直弼が幕府大老に就任すると、直弼は開国政策にふみきった。そして將軍継嗣についても、徳川慶福を將軍とするに決した。勅許を得ないで開港に決定した幕府の独断に憤激した斉昭らは、井伊大老の責任を厳しく追及した。直弼は斉昭のとった不時登城に対して厳罰をもつてのぞみ、斉昭は再び謹慎の身となった。同年八月、水戸藩にいわゆる戊午の密勅が降った。この勅諭をどう処置するかで、藩内はそ



第 213 図 豊田重章の手紙(鷹巢 豊田重光家蔵)

の苦悩を一層深めた。幕府はこの勅諭降下に働いた者達の処罰をはじめ、安政の大獄が起こった。水戸藩では四名の死罪が出たのである。

水戸藩に降った密勅をめぐって、朝廷へ返納すべきか否かで藩論が二分した。勅諭不返論の尊攘改革派は、実力をもって勅書返納を阻止しようとして水戸街道長岡宿に集合して、通行人をいっいち改め、勅諭の江戸持出しを防ごうとした。これを長岡屯集と呼んでいるが、この屯集に大宮地方では東野村の神官横山亮之介、前出の豊田重章らが参加している。

万延元年(一八六〇)八月一日、斉昭が六一歳で病死すると、第一〇代に慶篤が就任したが、藩内は二派に分裂して、家中のものばかりでなく農民までこれに加わって騒然とした藩情であった。イギリスをはじめ諸外国の軍艦が、北から南から日本近海に出没し、開国を迫っていた。幕府では井伊大老が暗殺されてから幕府の權威を取り戻すために、公武合体の政策が強引に進められていた。そのため、これを怒った水戸浪士たちは坂下門で老中安藤信正を襲撃した。水戸藩の尊皇攘夷はいよいよ過激化し、慶篤が藩主に就任してから四年後の元治元年(一八六四)三月末、藤田小四郎(東湖の子)らが、水戸の

町奉行田丸稻之衛門を総大将にして、筑波山に尊皇攘夷の旗をあげ、同志をつのつた。大宮地方からもこれに多数のものがはせ加わり、それから七か月の間、争いは水戸藩内の全領域におよび、天狗側に参加し、または諸生側に味方して徴発、放火、打ちこわしなど理性のない感情むきだしのはげしい争乱が行われた。天狗側には小四郎らの筑波拳兵を契機として、水戸藩内はもちろん他藩からも参加者が多く、日増しに勢力は盛んになっていった。この形勢をみて朝比奈、市川らの佐幕派は弘道館の書生らと結び、応戦の準備をした。筑波勢は旗あげ一週間後、日光東照宮に参拝し、栃木市外の太平山多聞院に拠って本陣とした。滞在すること一か月、小四郎らの軍用金調達は苛酷をきわめ、要求を断ると平気で放火、殺人を行い、「天狗」といって庶民を恐れさせた。とくに野口村の郷校から参加した田中愿蔵らの一隊は、小四郎らと別派行動を行い、資金徴発は略奪にひとしいほど苛酷だった。この状勢をみて藩主慶篤は深く心配して、山国兵部らを派遣して帰国するよう説得し、保守派の鈴木石見守、市川三左衛門らは主導権をにぎる好機到来とばかり、同志を糾合して筑波勢討伐に立ち上がった。幕府も群馬、栃木、茨城などの十数藩に出動を命じ、筑波勢討伐のために約六〇〇〇人の討手が下妻に陣を張った。そのころ慶篤が諸生派の人々を要職から解任したので、政変に驚いた市川らは水戸に急行し、天狗派の弾圧をはじめた。筑波拳兵に参加した天狗派の家族は捕えられて投獄され、天狗党を泊めた宿屋の主人までも制裁をうけられた。これを聞き知った筑波勢は、水戸城を奪回しようとして筑波山を下って水戸城に迫ったが、諸生党にさえぎられて、ただ市街戦を繰り返すだけの惨劇となった。救済に失敗した天狗党は水戸周辺で攻防戦を展開したが、八月になって水戸藩主慶篤は、支藩の宍戸藩主松平大炊頭頼徳を名代として鎮撫に向かわしめた。頼徳は水戸藩家老榊原新左衛門ら七百余名を率いて江戸から水戸に向かい、途中で武田耕雲斎、山国兵部ら天狗党に同情的な人々が合流し、八月一〇日、水戸に着いた。この一行を大発勢と呼んでいる。

大発勢の入城が拒否されると、頼徳は水戸戦争を回避し、磯浜に転進した。そして途中で待ちかまえていた諸生党と戦ってこれを破ったが、八月中旬本陣を那珂湊に移し、那珂川をはさんで二か月間にわたって攻防戦が繰りひろげられた。この那珂湊戦争には大宮村の内藤昇一郎をはじめ多数の者が参加している。また、この戦いで西塩子村の横山善之助、鷹巣村の豊田重則の両名が戦死している。那珂湊戦争に敗れた武田耕雲斎らは「このうへは京都に上って朝廷に訴えよう」と決意し、一〇月二三日那珂湊を脱出し、大宮、大子を経て栃木県にはいり、武州秩父から中部山岳地帯を抜けて北陸路に出て京都に向かった。この行軍は寒さと飢えに耐える死の行軍であった。この行軍に参加した天狗党の一人は、日記の中で次のように記している。

十月二十三日(晴) 那珂湊館山発足、那珂郡大宮泊り。入口少々砲戦一人殺す。

十月二十四日(晴) 山方朝飯、舟生にて奸民に出逢粟峠にて畑尾山右手の打合、同所にて東ヶ崎淺衛門戦死。

十月二十五日 朝より雨降、大沢峠にて少々砲戦大子奸民追払い泊り。

十月二十六日 所々見張にて同所泊り。

十月二十七日(晴) 月折口、川山口、左貫防戦泊り。此の日月居口にて大宮村立原伝十郎来り、左貫より一

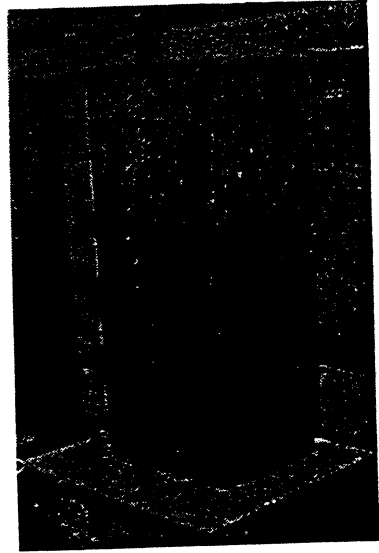
手寄来り寺を焼き退く。

十月二十八日(晴) 月折口防戦、武田大夫出馬、川山口追払い泊り。

十月二十九日(晴) 月折口にて薄手四五人薄井一人討死。此処鶏鳴出立。

十一月朔日(晴) 左貫越、野州堺にて黒羽根勢と砲戦、雲蔽寺前通り上寺へ泊り。

京都へ上る途中、大宮に野営したのは那珂湊を脱出した一〇月二三日夜であった。野営地は古老などの言い伝えては現在の中富付近の原野であつたらしい。大宮村に入る途中で交戦があつたらしく、敵を一人殺したと記録



第 214 図 佐藤角兵衛の墓

されている。翌二四日未明には大宮村を出発し、山方村で朝食をとっている。これは市川ら諸生党の討手をかわすために朝早く出立したものと考えられる。日記をみてもわかるとおり、行進の途中でふたたび諸生党と交戦しており、追手を逃れながらの苦難の行軍であった。朝廷直訴を最後の望みに北陸路をめざした天狗党の千余人であったが、裏日本の気候はきびしく、そのうえ飢えとの戦いに疲れ果てた武田耕雲斎らの一行は、ついに慶応元年（一八六五）正月に加賀藩の軍門に降っ

た。降伏したときの人数は八〇〇人余、そのうち三三三人が二月中に処刑された。このとき大宮村の内藤昇一郎、青柳留吉、鷹巣村の鴨志田伴七、上大賀村の河野藤四郎の四名が敦賀海岸で死罪となっている。残りのものは江戸佃島の牢獄や関宿藩などに預けられ、多数の者が獄死している。大宮地方からこの元治甲子の変に参加し、戦死、獄死、斬罪あるいは病死したものは、実に五六名を数え、二〇代、三〇代の働き盛りにこの争乱に関係したのであり、悪夢のような幕末の抗争であった。

天狗党が大宮地方に勢力をふるったこともあったが、その反対に諸生側の勢力がのびた時期もあった。諸生党の勢力としては、寺門民兵隊をあげることができる。寺門民兵隊は、額田村出身の寺門登一郎によって組織されたもので、天狗党に対抗した。元治元年八月末に、金沢地方（現日立市）で寺門民兵隊と天狗党派との戦いに、大宮村の佐藤角兵衛が天狗側に参加し、戦死している。寺門隊は天狗側の勢力が衰えると、天狗党に味方した家々

に狼藉を働いた。大宮地方には天狗党やこの寺門隊に乱暴狼藉をうけた家もあり、当時の狼藉ぶりを示す刀傷などが残っている例もある。

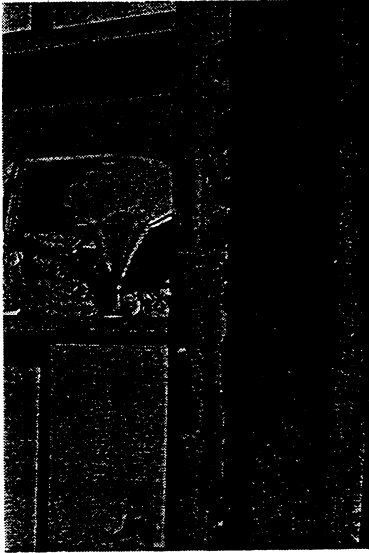
野口村の時雍館は、田中隊が去ったあと寺門隊に火をつけられ、郷校としての建物やまた多数の書籍等が失われたのである。

二 争乱に参加した人々

天狗諸生の争いは水戸藩内の尊皇、佐幕の両派が、総力をあげて戦う凄惨な争いであった。家中の武士はもとより、藩内の有力な農民までがいずれかに属し、有能な若人達を犠牲にしていった。この争乱で幕末から明治に至るまでの間に千七百余名の尊い生命が奪われ、名もない民衆を含めるとゆうに三〇〇〇名以上の犠牲者がた

といわれる。多くの人が争い共倒れになった結果は、やがて水戸藩が明治維新の主流からまったはずれることとなり、薩摩、長州、土佐など西南諸藩が主流派として明治の新政府に進出していった。水戸藩はまったく明治維新の火つけ役に終わってしまったといえるのである。

大宮地方からも多数の人々がこの争乱に参加し、しのぎをけずって戦い、五六名の人達が命を落としている。たとえば内藤昇一郎は天狗党の一方の



第 215 図 天狗諸生の争いの刀傷
あと(小祝 後藤欣七家)

旗頭をつとめ、幾多の戦いに小隊長として活躍したが、慶応元年（一八六五）二月四日、武田耕雲斎ら二三名とともに敦賀で斬られた。東野村地殿神社神官の横山亮之介は、江戸あるいは京都にあって尊皇派のために活躍したが、元治元年九月、第一〇代藩主慶篤の弟昭徳の内命をうけて京都から水戸に向かう途上、水戸藩の騷擾がはげしくて水戸に入ることができず、鹿島に向かうところを民兵に包囲され、力闘むなしく二九歳で戦死した。

大宮地方からこの争乱に参加し、戦死あるいは獄死した者をあげると次のとおりである。

黒沢金之介 大宮村、慶応元年六月朔日水戸獄舎において獄死、一八歳。

逆井源次郎 大宮村、明治元年三月二八日栃木県今市で捕われて斬罪、二五歳。

菊池源三郎 大宮村、元治元年九月九日中染村において戦死、二〇歳。

宮田忠蔵 大宮村、元治元年八月二五日石名坂にて戦死、天狗党の兵糧隊員、五〇歳。

佐藤角兵衛 大宮村、元治元年八月二九日多賀郡金沢村にて戦死、二九歳。

青柳留吉 大宮村、青柳孫兵衛の五男として生まれ、那珂湊に拠る、のちに西上して敦賀にて慶応元年二月

一九日死罪。

内藤昇一郎 大宮村、元治元年三月の筑波拳兵に参加し藩主名代の松平頼徳に従って奮戦、天狗党の小隊長をつとめる。慶応元年二月四日敦賀にて死罪、三五歳。

河野藤四郎 大宮村、慶応元年二月一九日敦賀にて死罪、年齢不明。

鈴木要介隆亮 大宮村、明治元年九月弘道館の戦いで戦死、四〇歳。

富塚藤衛門 大宮村、慶応元年六月一九日多賀郡滑川にて戦死、二二歳。

小林半七 大宮村、明治元年九月九日水戸獄舎にて死罪、三八歳。

大槻祐介 大宮村、明治元年五月一九日水戸獄舎にて獄死、四六歳。

中村忠介 大宮村、明治元年六月一五日水戸獄舎にて獄死、三五歳。

内藤儀左衛門 大宮村、明治元年五月四日水戸獄舎にて獄死、六二歳。

堤善兵衛 大宮村、武田耕雲齋らとともに越前敦賀において降伏、武田金次郎とともに遠島処分、二八歳。

安藤次郎衛門定之 小場村役人、元治元年一〇月二三日那珂湊において自刃、五二歳。

安藤東之進 小場村郷士、元治元年九月六日鹿島にて戦死、三三歳。

安藤又四郎 小場村、慶応二年七月二日江戸佃島にて獄死、四五歳。

猿田幸之介 小場村組頭、幸次郎の長男、那珂湊に拠ったがのち潜行して慶応二年八月二二日大関氏の兵に

囲まれて戦死、二六歳。

平沢金之介秀武 小場神官、明治元年五月一八日結城において死罪、三六歳。

宇留野源五郎配義 小野村、明治元年九月二八日弘道館の戦いに敗れて自宅に潜んでいるところを発見され

て戦傷死、四一歳。

小林平七 三美村、明治元年五月二日関宿藩にて病死、五〇歳。

西村善十 若林村、慶応三年一〇月一八日水戸獄舎にて獄死、三六歳。

長山長介 若林村、明治元年五月一日関宿藩にて獄死、三八歳。

石川勇七 若林村、明治元年五月水戸獄舎にて獄死、六五歳。

野上利平 若林村、明治元年八月五日水戸獄舎にて獄死、四八歳。

野上源次平 若林村組頭、慶応二年六月一六日江戸佃島にて獄死、五九歳。

